

部員各位

平成 25 年 6 月 22 日

内田尚希（政 3）

## 『銃・病原菌・鉄』

人類の格差はいつ、どこから生じたのか？

0、はじめに

- 1、人類のスタートライン
- 2、食糧的要因
- 3、家畜化可能な動物の有無
- 4、文字の誕生と発展
- 5、平等な社会から集権的な社会へ

0、はじめに

そもそもの問いとして何故格差は存在するのだろうか？その問いに答えるためには格差発生の起源を知らなければならない。何故 21 世紀の社会においてさえも先進技術を持つものと持たないものが存在するのか、何故世界の GDP が 60 兆ドルに達し、1980 年の 6 倍もの水準になっているにもかかわらず、貧困と病死はなくならないのであろうか。

アフリカの原住民と我々日本人は何がどう違うのだろうか。その違いは産業革命の発生が直接の原因であるが、産業革命が起こったのは文字の有無の違いによるものである。では文字の発生した文明としなかった文明に何の違いがあるのだろうか？遙か太古の 1 万 3000 年前まで遡り、格差の本質と現代社会の起源をご紹介しようと思う。

### 1、人類のスタートライン

人類の歴史の出発点は約 1 万 3000 年前の更新世の最終氷河期の終わりである完新世が始まった時期である。人類の歴史は今から 700 万年前と推定されており、400 万年前に直立歩行を始めている。ヨーロッパに人類が存在した痕跡は最古のもので 50 万年前とされており、その時すでに人類は火を扱っていたことが確認されている。

5 万年前になると人類の活動の痕跡は多く残っており、フランスのラスコー洞窟などもこの時代に描かれたものである。そして当時地続きであったオーストラリア、ニューギニアへと人類は拡散し、その時期はオーストラリアから大型動物が絶滅した時期と重なることから証明されている。

一方、南北アメリカ大陸には人類が最後に定住した。アメリカ大陸に渡るためにはシベリアを通り、ベーリング海峡を渡るしかないが、人類は厳冬であるシベリアの寒さを克服することができずにいたからである。当時地続きであったベーリング海峡を渡ることができるようになったのは今から 1 万 2000 年前にすぎないのである。



人類の発生と分散の図

(出典：ジャレド・ダイヤモンド著『銃・病原菌・鉄』)

## 2、食糧的要因

生物の目的である自己保存と種の保存を達成するために必要なものはエネルギーの摂取である。摂取できるカロリーが増えれば人口も増加するのである。ところが、野生の動植物の大半は人間が摂取できない形で存在し、消化できないもの、毒のあるもの、栄養価がないもの、危険で捕獲できないものばかりである。当然一つの土地当たりから摂取できるカロリー量が増えれば人口が増加し、軍事的に有利になる。農耕民の方が狩猟採集民よりも軍事的に有利になるはずである。また、農耕は定住生活を可能にし、幼児を連れて移動する必要もないので出産の間隔も短くなる。こうして農耕民は狩猟採集民よりも高い人口密度を獲得したのである。そして、定住生活は食糧の貯蔵、蓄積を可能にする。このことによってより安定した生産活動が可能になるのである。

そこでそれを管理、統制するための王族と官僚が出現し、課税を行う。そして、彼ら以外にも農耕に従事しなくて済む人間が出てくる。それが職業軍人である。

### 2-A 食糧生産の地域差

人類史の大部分を占めるのは持てるものと持たざる者の中で繰り広げられる衝突の歴史である。つまり、農耕民としての持てる者が、その力を持たざる者に対し展開してきた不平等な争いの歴史であった。地球上には食糧生産が全く行われない地域が複数存在し、現在の技術をもってしても食糧生産が不可能な不毛地帯は沢山ある。ところが、不思議なことに環境は適しているにもかかわらず、食糧生産が行われない地域が多数存在する。カリフォルニア州などの太平洋側の各州、アルゼンチンの大草原地方、オーストラリア南西部、南アフリカのケープ地方である。逆にメキシコ、アンデス、アフリカのサヘル地域など環境が適していない地域で農耕が行われているケースも多数存在する。また食糧生産の開始時期についても大きな開きがある。この差異はどのように生じたものなのだろうか。

## 2-B 食糧生産の年代の推定

では、人類はいつ、どこで食糧生産を始めたのか。その問いに答える必要がある。食糧生産が始まった地域は確証のあるものが 5 か所であり、メソポタミアの肥沃三日月地帯、中国、中米、南米のアンデス地帯、そして、合衆国東部である。

注目すべきなのは、ヨーロッパ西部である。この地域では、他の地域からもたらされた食物が発掘されているが、その種の野生種の祖先は発見されていない。つまり、ヨーロッパ西部で独自に食糧生産が行われることはなかったということである。では、食糧生産のきっかけとなったのは動植物であるのだろうか。エジプトの場合、土着の狩猟採集民が近隣の農耕民から飼育栽培種をもらいうける形で、農耕民に変わっていったようである。南西アジアの栽培技術、農耕技術、飼育技術を利用するようになり、狩猟採集生活から、農耕生活に移行したようである。食糧生産の引き金はよそからやってきた人ではなく、動植物の存在であったようだ。これらの地域と逆の場合もある。人間が食糧生産の引き金となった場合もある。これは近世になり、ヨーロッパ人が入植した例である。カリフォルニア、アルゼンチン、オーストラリア、シベリアなどである。彼らはその土地の人口構成を変化させ、飼育栽培種を持ちこみ、環境を大きく変化させている。

いずれにせよ、他の地域より早く農耕を始めた文明は他の文明よりも早く疫病に対する免疫を備え、製鉄の技術を生み出すことに成功し、持てる者と持たざる者を生み出したのである。

## 2-C 農耕を始めた人と始めなかった人

紀元前 8500 年頃にメソポタミアで農耕が始まったが、気候や地形が似ているヨーロッパ西部では 3000 年後の紀元前 5500 年頃になるまで農耕が開始されなかった。ここにはどのような差異があるのだろうか。現代人ならば、狩猟採集が農耕よりも苛酷であるということ想像するだろうが、しかし実際には農耕民が必ずしも狩猟採集生活より優れているわけではない。初期の農耕民になった人は狩猟採集民よりも体が小さく、栄養状態も良くなかったとされている。また病気にかかりやすく、寿命も短かったようである。

食糧生産の起源を考える上で前提として、農耕民と狩猟採集民を二つに分けることが誤りであり、日本でも定住生活をするようになってから農耕を始めるまでにはかなりのタイムラグがあるとされている。逆に移動しながら食糧生産を行う場合もあり、合衆国南西部に居住していたアパッチ・インディアンの場合、夏は北の高地で農耕生活を送り、冬は南の低地で狩猟採集生活を送る。このように農耕の開始は移動生活から定住生活への転換を必ずしも意味しないのである。人々は食糧生産を始めると同時に狩猟採集生活をやめた訳ではなく、徐々に食糧生産への依存性が高まるにつれ、移行していったのである。

## 2-D 食糧生産を促したもの

要因は4つ

- ・入手可能な自然資源が減少したこと＝野生生物が減少、または絶滅したこと
- ・栽培可能な野生種が増えたこと＝氷河期が終わり、自生する穀類が増えたこと
- ・技術、ノウハウの蓄積＝収穫するための鎌、貯蔵用の貯蔵穴など
- ・人口密度の増加＝必要な食糧が増加することによる必要性の発生

上記の原因を総合し狩猟採集民が農耕民と入れ替わった直接の原因は家畜による病原菌への免疫、職業軍人の存在による侵略である。

### 3、 家畜可能な動物の有無

人間がカロリーを摂取する方法として植物以外には動物の存在がある。農耕生活により定住化した人類は一定の動物を家畜にすることで使役し、食糧を得た。また、農業に必要な肥料、輸送運搬手段、皮や毛軍事的な動力など、その有用性は極めて高く、家畜化に成功したか否かも人類に大きな差を生みだした一因である。

哺乳類で家畜化されているのは現在まででたったの14種しかおらず、羊、山羊、牛、豚、馬のメジャーな5種類とヒトコブラクダ、フタコブラクダ、ラマ、アルパカ、ロバ、トナカイ、水牛、ヤク、バリ牛、ガヤルのマイナーな9種に分けられている。これらの動物の家畜化は紀元前8000年頃から2500年頃に集中している。その過程で野生種とは別の形質を獲得し、その他の動物は家畜化されなかったのである。

生産活動に適しているが、文明が発達しなかった北米、オーストラリア、サハラ砂漠以南には14種のうち、いずれも生息しておらず、ユーラシア大陸には13種もの家畜可能な動物が生息していた。これは単にユーラシア大陸が最大の大陸であり、多様な環境があったからに他ならない。

19世紀に騎馬戦でバイソン狩りを行っていたインディアンは17世紀まで馬を家畜にししていなかったし、ヨーロッパ人が連れてきた犬をアボリジニは10年もしないうちに猟犬として使うようになっている。これらのことはその土地の人間に問題があるのではなく、その地域の動物に家畜化できない理由があることを示唆している。

#### 3-A 家畜化されなかった理由

家畜の候補となりうる陸生の大型草食動物は148種であるが、実際に家畜化されたのは14種であり、これらの動物の分布が、ユーラシア大陸とその他の大陸における重要な相違点であることは述べてきた。では、その他の大陸の動物は何故家畜化できなかったのだろうか。

- ・餌の問題＝草食動物を餌とする肉食動物は餌の経済効率が悪いので家畜に向かない
- ・成長速度の問題＝ゴリラや象は成長に15年の歳月を要するので家畜に向かない
- ・繁殖上の問題＝チーターやビクーニャは野生でないと繁殖ができない

- ・気性の問題＝グリズリー、アフリカ水牛、カバ、シマウマなどは家畜としての価値は高いものの人間が殺される可能性が高く、家畜化ができない
- ・パニックになりやすい性格＝ガゼルなどの草食獣はパニックになりやすく飼育に向かない
- ・序列制のある集団を形成しない＝家畜は群れを作ること、集団内の序列がはっきりしていること、群れごとの縄張りを持たないことが条件として必要である。序列制のある集団を形成する動物は人間が頂点に立つことで集団の序列を引き継ぎ、動物たちを効率よく支配できるので、家畜化にはうってつけの動物である。逆に縄張りを形成するサイや、レイヨウ、群れを形成しない猫やフェレットなどは家畜には向いていない。

上記の全ての条件を満たすのはたったの 14 種ということになる。ユーラシア大陸が、その他の大陸よりも歴史の中心にあったのは紛れもなく、家畜化に成功したかということである。ユーラシア大陸がより高度な文明を築くことができたのは家畜化可能な動物が多く生息していたことにあるのであって、ユーラシアに住む人がその他の大陸の人よりも優れていたということでは決してないのである。

### 3-B 家畜がくれた死の贈り物

人間の死因で最も多いのが病死である。天然痘、インフルエンザ、結核、マラリア、ペスト、麻疹、コレラ、エイズなどはもともと動物だけがかかる病気である。戦場では負傷して死亡する兵士より、病気で死亡する兵士の方が多かったのである。

人類史上最も猛威をふるったのは第一次大戦後のインフルエンザで、世界で 2000 万人が命を落としている。1346 年~52 年にかけて流行した黒死病は当時のヨーロッパの全人口の 4 分の一が失われた。

これらの病気は家畜を手に入れた代償として払う犠牲であった。結核や天然痘は牛から、インフルエンザは豚から、百日咳は犬から感染し、多くの人々の命を奪う結果となった。これらの病原菌は農耕に家畜を使うようになったことで発症し、定住生活をするようになったがために被害を拡大したのである。

### 3-C 旧大陸からやってきた病原菌

アメリカ先住民の人口はヨーロッパ人による征服により、その数が激減した。600 人のスペイン兵が 2000 万人のアステカ帝国を征服したのはまさに天然痘の大流行によるものであり、1618 年には人口が 160 万人にまで激減していた。アメリカ大陸の人口はコロンブスがアメリカ大陸を発見して以来、200 年もたたないうちに先住民の人口は 95%も減少していたのである。

逆に新大陸特有の集団感染がなかった理由としては、家畜化する動物の種類が少なかったこと、大きな群れを形成する動物が少ないことなどが挙げられる。

このようにしてヨーロッパ人がアメリカ大陸を支配できたのは武器を作る技術、航海術によってではなく、家畜のもたらした死の贈り物が多大に関係していたのである。しかし、アフリカの場合、マラリアや黄熱病などがヨーロッパ人の行く手を遮っていたことも事実である。

こうして、食糧生産技術と家畜化、それに伴う犠牲の克服によりヨーロッパ人はこの不平等な現代世界を構築していったのである。

## 4、文字の誕生と発展

ヨーロッパ人の支配が始まるまでオーストラリア、太平洋諸島、赤道アフリカの人々は文字というものを持っていなかった。

文字は昔の出来事を教えてくれ、大量の知識を正確に伝達してくれる。インカ帝国は文字がなくとも大帝国を築くことができたし、フン族がローマ軍を圧倒したように文明人が野蛮人に常に勝利してきたわけではない。

文字は先人が残した情報を伝え、政治的統治に欠かせない要素であった。しかし、文字を発達させた民族と発達させなかった民族がいるのは何故だろうか。

### 4-A シュメール文字とマヤ文字

歴史上、独自に発明された文字システムはメソポタミアのシュメール人が紀元前 3000 年頃に作り出したものと紀元前 6000 年頃にメキシコ先住民が作り出したものである。また、紀元前 3000 年に古代エジプト人が作り出したもの、中国で紀元前 1300 年頃に作られたものも数えられる。

言語は発音と文字を組み合わせる用いられるのが基本であるが、シュメール人が作り出した楔形文字も最初は単語の羅列にすぎなかった。しかし、シュメール人は絵で描ける名詞をそれと同じ発音の抽象名詞として使うという、同音異義語のアイデアによって表わすことを思いつく。これは英語で believe という単語を書くのに bee (蜂) と leaf (葉) をつなげて書くことで bee-leaf と読ませるような具合である。

もう一つのマヤ文明の文字は独自に考案され、文字の形もその他の大陸のものとは異なっている。にもかかわらず、シュメール語と同様、表意的な記号と表音的な記号の両方が含まれており、表意的な記号が、同じ発音を有する抽象的な意味を表わす単語を同音的に表記するために使われている。

### 4-B 文字の伝播

歴史上、文字はシュメール文字か、マヤ文字が改良されたか、これに刺激を受け作られたものとされている。シュメール人は数千年をかけて文字システムを完成させている。そして、文字の発達にはいくつかの社会的要素が不可欠であった。文字が使用されるようになるには社会にとって有用でなくてはならない。文字の読み書きを専門とする人々を養う

生産性がある社会である必要があるのである。

#### 4-C 既存文字の借用

世界には現代でも文字のない言語が存在する。言語学者はそうした言語のためにアルファベットを修正し、音節表記ができるようにするのである。例えば、ニューギニアやアメリカ先住民の言語を記述するためにローマン・アルファベットをもとにした。ロシアの少数民族のためにキリル文字のアルファベットを改良するなどの例がある。

既存文字の借用は、多くの事例があり、ロシアのキリル文字は布教目的でやってきた聖キュリロスがギリシア文字とヘブライ文字をもとに作り出した文字である。また、ミケーネ文明の線文字Bはクレタ島のミノス文明の音節文字であった線文字Aをもとに作成されている。

アルファベットはヨーロッパ世界で様々な形で用いられ、その数は何百にもなる。こうして既存文字の借用が行われていたのである。アルファベットの歴史はエジプトの象形文字にまで遡ることができる。これは24個の記号が使われていたが、表音的なアルファベットに発展したのは紀元前1700年頃であった。

#### 4-D 文字を使える人々

始めの疑問に戻るが、文字が広がっていった社会と広がらなかった社会にはどのような違いがあるのだろうか。これに答えるには文字の使用が限られていたこと、表現力が限られていたことに着目する必要がある。

単語のみしか表記できなければ、混乱が生じてしまうため、政治的に使用することは困難であった。また、使用者が限られるという点も一般に広がることはなかった理由である。当時は王宮や寺院に仕えていた書記だけが読み書きできるものであった。

当時の人々にとって特別な意味を持つ文字はこれらの問題を解決する必要はなかったのである。特定の階級の人間が一般人を支配するために用いていたからである。人類学者であるレヴィ＝ストロースが指摘するように「他の人を隷属化させるために」使われていたからである。

文字が広がっていったのはアルファベットが登場し、文字が単純化され、一般の民衆にも扱えるようになっていったところからであり、紀元前740年頃のワイン壺に「ダンス大会で一番上手に踊った人が此の壺を商品として勝ち取る」と書いてあるものが確認されている。

#### 4-E 地形、自然環境

文字を作り出すためには余剰の食糧生産をする必要があるが、食糧生産をしたからと言って文字が生み出されるわけではない。文字を生み出さなかった文明は文字を生み出した文明との距離があまりに離れていたことにある。とくに、ハワイとトンガは6400キロ行か

ないと最も近い文字を持つ文明に接触できない。西アフリカはサハラ砂漠により、北アフリカと隔てられ、ミシシッピ周辺の民族も北メキシコ砂漠により隔てられていた。メキシコ南部とアンデス地方はダリエン海峡の未開のジャングルを進むしかなく、孤立していたのである。このように言語の伝播は技術の伝播とほぼ同じように地形や自然環境次第であったことが分かる。

## 5、平等な社会から集権的な社会へ

現代社会を支配しているのは最も早く国家を形成した人々の子孫である。そしてこれが直接的な現代社会の起源である。これらはいつどのようにして形成されたのだろうか。

### 5-A 小規模血縁集団

人間は社会性生物であり、集団を形成する。そこでいくつかのグループに分けることができ、小規模血縁集団、部族社会、首長社会、国家の4つに分けられる。小規模血縁集団は5人から80人で構成され、メンバーのほぼ全員が血縁関係にあるか、親戚関係にある。狩猟採集民は基本的にこの集団により組織され、移動生活を行う。彼らは立場が平等であるが、それは平等な権限を持つという意味ではなく、メンバーが社会的に区別されていないという意味である。小規模血縁集団ではリーダーの決定は個人の人柄、知性、戦いの技量に由来し、リーダーが非公式に決定するのである。彼らがより大きな集団になるにはやはり食糧生産による恩恵が必要であった。農産物を一定の場所で繰り返し育てることで定住生活が可能となり、人口の増加が可能となったのである。

### 5-B 部族社会

部族社会は数百人規模で定住生活をしていることが多い。部族社会は複数の血縁から氏族グループを有しており、グループ間で婚姻を行うことも特徴である。人口が数百人以上の集団は首長社会と呼ばれる。集団内で発生する事件は血縁か婚姻関係にあり、関係者が圧力をかけることにより、事態の收拾を図る。こうして小規模血縁集団と部族社会は異なる点があるが、共通点もある。部族社会は依然として平等な社会である。税金が存在せず、特別な職人もいないため、労働の分化も発生しない。そして労働の専門分化が進んでいない社会では奴隷も存在しない。

### 5-C 首長社会

首長社会の特徴は土地を占有していることにある。首長社会は肥沃な日月地帯で紀元前5500年前頃にあったと確認されている。人数は数千人から数万人規模であり、血縁、婚姻関係がない人間が増加してくる。これは従来の問題を解決するための機能が果たされなくなることを意味し、権力を行使できる特定の人間が出現するようになる。これが首長である。しかし、首長社会の官僚システムは分化されておらず、多くの仕事をこなしていた。



首長社会は特定の専門職が現れ、工芸品や、希少品が首長の下に集められ、首長の埋葬は平民とは明らかに区別されるようになった。首長の家系は特別な扱いを受けるようになり、首長を世話するための奴隷も出現し、首長と平民に差が生じるようになった。

経済的には、今までのふたつが物々交換の経済であったのに対し、首長社会はそうでないところに特徴がある。首長は収穫期に農民から小麦を集め、祭りの際に全員にパンを配るなどの再分配機能を発達させ、不平等から生じる不満を解消していた。そして権威が高まるとともにそれは首長への捧げものへと変化していったのである。

首長社会は官僚が細分化され、より専門性の高い行動が可能になり、公共建造物が作られるようになったのである。

#### 5-D 富の再分配

首長社会にはすでに政治的格差、経済的格差が生じていたことが分かる。この格差は平民に不満をもたらし、統治を不安定にする可能性がある。そこで首長社会はどのように統治を行っていたのだろうか。

- ・民衆から武器を取り上げ、エリート階級を武装させる。
- ・集めた富を民衆が喜ぶ形で再分配する
- ・独占的な権力を利用し、治安を維持する
- ・イデオロギーや宗教を利用し、統治や支配階級の正当化を図る

#### 5-E 国家の形成

初期の国家は規模を拡大した延長線上にあると考えられ、百万人を超える規模である。首長社会が国家になる時、そこは都市として大々的な公共活動が行われ、食糧生産以外の労働を専門とする人々が多く存在する点で首長社会と異なっている。国家では紛争解決の手段として法律が誕生し、それを扱うために文字を扱うエリートが出現した。国家は血縁関係や婚姻関係ではなく、政治的な関係で複数の言語、習慣を持つ人々が共存している。

ルソーの社会契約説によれば、人々が冷静な判断をした結果、単純な社会を放棄し形成されるものであるとされているが、小規模血縁集団に属する人々が望んで自分たちの主権を放棄することはないはずである。アリストテレスは国家は自然発生的に生じるとしたが、1492年当時、国家は圧倒的少数であり、首長社会が普通であった。

人口が増えるとその集団は複雑化する。そこに国家が形成される要因があるはずである。

人口が大規模化するための前提は食糧生産にあることは何度も述べてきた。余剰の食糧生産が可能になれば、人口が増加する。人口が増加すれば、生産活動以外に従事する人が出現し、技術が生まれ、伝播する。

人間社会は食糧生産を開始することで灌漑施設などの公共建築物を作ることが可能になっ

たこと、征服戦争を行えるようになったことが一つ。余剰食糧により、エリート階級が生じ、首長、官僚が生じたことが二点目としてある。そして定住生活である。

人口が増加すれば紛争が増大し、復讐が復讐を生み出す環境が生まれる。そして中立的な立場をとることができる人間がいない場合、個人間の紛争は集団間の紛争に変わる。

また、人口の増加は意思決定を困難にし、情報の伝達や共有に差が生じる。そこで体系的に複雑化したルールとそれを扱う人間が必要になる。

経済的な側面としては集団の規模が大きくなると物々交換だけでは不平等が生じるため、再分配がなされなくてはならなくなる。

そして人口密度の問題であるが、定住生活は人口密度を急激に上昇させる。これは土地の分割や生活必需品の確保が困難になる。

以上のような理由から国家は複雑化し、人間集団の収斂の結果として生じるものである。

## 6、総論

人間は1万3000年前から既に格差が生じる原因を持ち合わせていた。しかしそれは、コーカソイドが優れていて、ネグロイド、モンゴロイドが劣っていたということでは全くない。環境的要因が問題であったのであり、人種に優劣があるわけではない。現代社会における格差と差別は偶然の産物の積み重ねにすぎないのである。格差は栽培可能な穀類などの主食の有無、家畜可能な動物の有無、言語や技術が伝播可能な地域であったか、余剰の食糧生産が可能であったか、というそれだけの問題なのである。まだまだ不明確な部分は多いものの、今回の読書会が皆さまの思考の一助になれば幸いである。

## 7、参考文献

『銃・病原菌・鉄』 著 ジャレド・ダイヤモンド 訳 倉骨彰

発行所 草思社 2012年2月10日 第一刷発行

以上